

編集後記

インフォメーションテクノロジーセンター所長
文学部教授 柴田 一

新型コロナウイルスの影響により、本学では2020年4月20日から、準備期間が事実上ないままに「インターネットを利用した遠隔授業」が始まった。開始初日は全学生数約3万人のうちの約2万6千人が午前中にLMSにアクセスし、スローダウンを起こした。しかしながら、システムをHCIで構成していたため、当日の夜、持てるシステムリソースをLMSに最大限融通することで、2日目以降を乗り切りながら、ゴールデンウィークにかけて物理的にもシステムの増強を行った。その結果、春学期も終わりが近くなった現在に至るまで大きなトラブルもなく授業のインフラ環境を運用できた。この間にITセンター職員が見せた、正確な判断力、迅速な対応を成し遂げた行動力、高い技術力には感服した。

遠隔授業は、教員にとっては対面授業の5倍以上の労力がかかり、学生も授業毎に出される課題に追われている。今学期は誰もが、心身ともに疲れ果てているのである。このような状況にあるにも関わらず、ここに本年報の発刊に至ったことは、関係各位に心より感謝する次第である。

一方、この間の遠隔授業が教育やICTによる教育支援に与えた影響を別の観点からとらえると、学生はZoomのリアルタイム授業には全員が遅刻することなく出席し、上述した課題をこなすために学修時間はかなり増えている。システム利用では、疲労に加え、バイトもなくなったのであろう、以前は深夜にもかなりいた利用者が、24時を過ぎると朝まで極端に減少した。健全になったのである。

教員の一人としては、オンラインで配信するため、さまざまな媒体に散在していた対面授業の板書内容を、全てPowerPointスライドに移植した。その際、あいまいな表現を正し、内容の見直し・アップデートを行った。いずれやらねば、とかねてより思っていたことの背中を押されたのである。

ICT環境については、遅々として進まなかったオンライン授業やLMSの利用が半ば強行推進された。また、結果として1学期間パソコン教室を使用せずに授業ができたわけで、松田剛 社会学部准教授の投稿にあるように、BYOD推進の千載一遇のチャンスが到来したのである。

さらに、桑門秀典 総合情報学部教授の投稿に関連して、この間、LMSについて4千件を超えるメールでの問い合わせが授業支援ステーションに寄せられた。人工知能を利用した、24時間体制で回答者や質問者によらない均しいサービスの提供の実現に向けての貴重な学習データが得られたのである。

コロナ禍は教育にも多くの災難をもたらしたが、故事にあるとおり「禍を転じて福と為す」チャンスも運んできたようである。

最後に11年間の所長の務めを支えていただいた皆様に感謝の意を表して編集後記を締めくくりたい。ありがとうございました。